

日本とブラジル（リオデジャネイロ）の算数・数学教科指導と実践

前リオデジャネイロ日本人学校 教諭

兵庫県神戸市立須磨北中学校 教諭 来代 剛行

キーワード：在外教育施設、教育事情の比較

1. はじめに

ブラジルは、地図で見ると南米大陸の約半分を占め、面積は日本の約23倍、ロシア、カナダ、中国、アメリカに続き世界第5位の広大な国土を持つ。中南部は平地が多く、湿原や大草原があり、南東部には山岳地帯がある。また、北部はアマゾン川流域とブラジル高原からなり、熱帯雨林に覆われた人跡未踏のエリアも多い。

人種構成も様々で、古くから先住民と白人、黒人が混血を重ねてきた上、ポルトガル人、イタリア人、ドイツ人、日本人、アラブ人など数多くの移民を受け入れてきたため今では人種が入り乱れ、それぞれの地域で人種のばらつきはあるものの、実に多様性に富んだ国である。

世界最大の日系社会があるブラジルのことについて、恥ずかしながらこちらに来るまでほとんど知識が無かった私には、日本や日本人にこれほど友好的な感情を抱いてくれることが不思議であった。しかしながら、100年以上も開拓者として命をつないできた日系移民の方々に触れる中で、日本に住んでいる以上に日本のことを大切にしながらブラジルの発展にも貢献し、現地の方々からも信頼を得て、確固たる地位を確立していると感じることができた。

2. リオデジャネイロ日本人学校

リオデジャネイロ日本人学校は1970年リオデジャネイロ商工会議所内に教育委員会を設置、翌年に日本人子弟教育会を設立し、政府補助も決定、同8月にリオデジャネイロ日本人学校が設立された。当初は児童生徒53名だったが、日本企業の進出もあり、一時期は400名を超えるに至った。しかしながら、日本企業の撤退や治安悪化等の理由により、現在は小中学校あわせて12名程度で推移しており、世界でも最小規模日本人学校となっている。きめ細かい指導をモットーに教科指導はできる限り、学年ごとの授業を実施しており、英語圏ではないものの、英語科の授業に力を入れており、小学部で英検3級合格、中学部では英検2級合格を目標としている。現地理解教育として、日本語モデル校との交流、アメリカンスクールとの好流、ポルトガル語授業の全学年受講のほか、漢検受験についても授業内で実施するなど、特色あるカリキュラムを実施している。

昨年度までは、7時間目授業を週2回実施し、私が担当した算数・数学教育にも力を入れ、3年生以上の学年で算数・数学的な思考力を高めるための課題学習にも挑戦した。

サンタテレーザにあった日本人学校校舎は、周囲の治安悪化に伴い閉鎖を余儀なくされ、現在は、コスメヴェーリョにある日系協会の日本語モデル校校舎を使用しているが、児童生徒減の状況が変わらない中、新校舎への移転は難しい状況になっており、運動場がなく、教室も老朽化している状況を受け入れざるを得ない状況になっている。しかしながら、1人ひとりを大切にする教育が行われており、子供たちは関係団体からも温かい応援を受けながら、全員が家族のように健やかに成長している。

2. ブラジルの教育事情

ブラジルの教育は1990年代に「教育基本法」を定め、基礎教育の普及に国を挙げて取り組んでいる。政府は2010年にGDPの約5.8%、約3兆円を教育に投資しており、識字率や就学率が大幅に改善されている。

教育制度では、義務教育が7歳から8年間だったのが、6歳から14歳の9年間に延長（前期5年が小学校、後期4年が中学校に相当）されることになっており、2020年までに全面移行するよう取り組んでいる。また、幼

児教育も義務化されることとなっており、将来的には義務教育は4歳から14歳までの11年間となる。

児童生徒の6割は公立学校に通っており、公立の場合、学費は無料で教科書は支給され、給食も無料である。リオも含めて多くの都市の学校は、就学人口の増加に合わせ、1日2部制、3部制となっている。午前、午後と別の児童生徒が通い、夜間には義務教育を終えていない成人や若者が通うという方式がよく見られる。教科は公立学校の場合、前期初等教育で、ポルトガル語・算数・自然科学・歴史と地理・芸術・横断的テーマと倫理・環境と健康・文化多様性・性教育である。後期初等教育は、ポルトガル語・算数・自然科学・歴史・地理・芸術・体育・外国語・環境・健康・文化多様性・性教育である。検定制度もあり、私立学校は独自に教科書を採用している。

貧富の差が激しく、相当数が公立学校に依存している状況の中で、学校現場での教育と教育行政や社会の仕組みが大きく関係しており、国や州政府がどのような施策を行うのかが問われている。教科書や教員の状況を含めて、教育を支える仕組みについて考えることとした。

3. 学校訪問（ミラフローレンス幼稚園・初等教育学校）

幼稚園と前期初等教育の私立学校で、英語教育や環境教育を推進するなど、先進的な取り組みを行っている。2月から学年が始まり、3ヶ月ずつで学期が分かれている。7月が冬休み、12月の下旬～1月下旬にかけて夏休みがある。

午前中はポルトガル語での授業、午後からは英語での授業で、全日の受講も可能であるなど、保護者のニーズに応じた授業が選択可能である。通学バスも充実しているが、約半分は保護者が自家用車で送迎、富裕層の英語教育を臨む家庭が大半を占めている。

また、施設設備も充実しており、コンピュータ室や図書館等もある。教室は全教室ホワイトボード、パソコンによるプロジェクター授業となっており、教具類も丁寧に管理・使用されている。1日のスケジュールを確認し、各授業ではグループ学習を取り入れたり、子どもたちに考えさせ、討論や発表を主体的に行う授業が多かった。

さらに、指導法も研究している様子がかかえ、ICT（Information and Communication Technology）教育やTT（Team Teaching）による授業なども積極的に推進しているとの話であった。教師および指導支援者の数が多く、児童生徒10名に1名程度の教員が配置されている。

保護者との懇談会や月1回程度土曜日にイベントや発表会の開催など保護者とのコミュニケーションも大切にしており、宿題等もほぼ毎日出され、各家庭に協力を要請しつつ、欧米型の創造的な学習を展開しようとしている。

4. リオ日本語教師会

リオデジャネイロで日本語教師として現地で活躍する方々が、「リオ日本語教師会」を結成し、定期的に学習会や講演会を開催し研修を行っている。在リオデジャネイロ日本国総領事館広報文化センターと同教師会との共催で、「日本月間セミナー」が開催され、私は「教育と社会」というテーマで講演会を行った。日本人学校の紹介と日本の教育や子どもたちの様子を伝えることが主だったが、その後のディスカッションでは「学校現場におけるいじめについて」等、ブラジルでも課題となっていることについて議論がなされた。日本語教師としてだけでなく、ブラジルの学校



現地私立校3年生のクラス



日本の教育事情発表・ディスカッション

現場で活躍されている方々がほとんどであったが、現場教師同士が意見交換できる機会として大変有意義なものであった。

ブラジルには、社会全体が子どもたちに大変好意的かつ寛容な環境があり、子育てや教育に成果が期待される場所である。しかしながら、特に初等教育に携わる教師たちの待遇が悪く、社会的な地位の低さや教師側の意識の問題がある。昇給を交渉に委ねているこの国では、毎年ストライキが長期化し、その間学校では授業ができなかったりと経済や社会制度との関わりの中で、子どもたちにも影響が大きく及んでいる。

貧富の差による学歴格差の拡大、教育と社会の関係等、教育を取り巻く状況が社会問題と大きな関わりを持つ中で、現場での教育をどう維持・向上させていくか、ともに考えていくことが必要であると感じた。

5. ブラジルの教科書

教科書自体が非常にカラフルで、絵や写真を多用しており、現場でのマテリアルがなくとも補えるようになっている。教科書の配列も日本とよく似ているが、小学校5年生までは、ほとんど教科書に書き込めるようになっていて、ノートを書いたり、手元で作業を行ったりという必要が無いように作られている。割り算の筆算については、日本の方法より暗算を必要とする方法で、おつりの計算を足し算で考えるなど、日本の教科書からすれば、少しアプローチの仕方が違うものもある。ブラジルの教科書において、計算（特に分数）については低学年から比較的丁寧に扱われている。平面図形や立体図形なども、日常的・具体的な形を使ってイメージしやすいよう工夫されている。

ただ、教科書だけで完結してしまう分、実際に指導する教室では、板書やノートも必要とせず、指導者の工夫の余地があまりみられない。小学校の高学年になると文章記述が多く、説明中心の授業となり、より教科書に依存する状況となっている。

ブラジルでは、初等・中等教育に携わる教員の給与は最低賃金に近い状況にあり、社会的地位も比較的低いものとされる。教員のストライキにより授業が実施されない期間が続いたり、資質向上へ教員自身のモチベーションが持てない現状を改善する必要があるように感じた。

6. スポーツクラブについて（フルミネンセ クラブ）

ブラジルは、老若男女問わず、サッカーが好きな国であり、各チームは地域に密着している。リオにはジーコの所属していた名門「フラメンゴ」をはじめ、3チームが存在しているが、「フルミネンセ」はその1つである。本拠地の練習場は、「クラブ」と呼ばれ、サッカー練習場をはじめ、体育館ではバスケットボール、体操、柔道、卓球、屋外ではフットサル、バレー、水泳（競泳、飛び込み）、テニスなどあらゆるスポーツが楽しめる。ブラジルらしく、サッカー博物館やショップ、レストランや軽食・バーベキューが楽しめる場所、美容院、子どもが遊べる遊具のある広場などがあり、1日中過ごせるようになっている。それぞれに専属コーチがいて、大人だけでなく午前または午後だけの小中高校生の習い事としての受け皿となっている。スポーツに親しむ小学校低学年から、本格的な競技選手育成課程まであらゆる段階がある。週末は公式戦なども開催され、地域密着型のクラブ活動、青少年育成活動を担っている。

サッカーのクラブチームが地域密着型のスポーツ活動を形作っているのは、大きな特徴と言える。日本の小学校で行われているスポーツ活動や中学・高校での部活動のあり方が問われている中で、大変興味深いものであった。